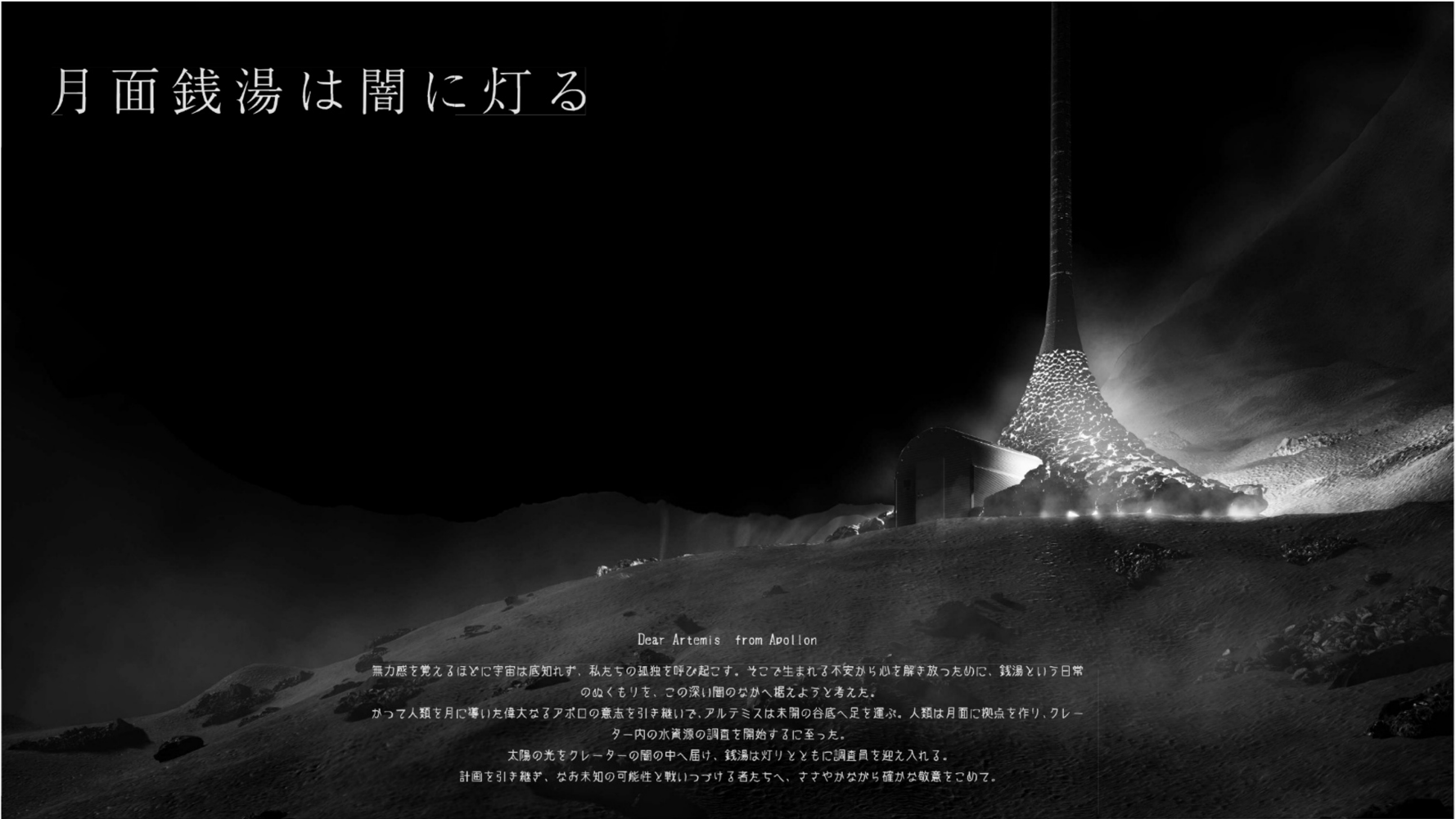


月面銭湯は闇に灯る

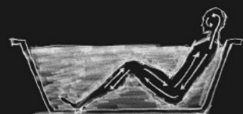


Dear Artemis from Apollon

無力感を覚えるほどに宇宙は底知れず、私たちの孤独を呼び起こす。そこで生まれる不安から心を解放するために、銭湯という日常のぬくもりを、この深い闇のなかへ届えようと考えた。
かつて人類を月に導いた偉大なるアポロの意志を引き継いで、アルテミスは未開の谷底へ足を運ぶ。人類は月面に拠点を作り、クレーター内の水資源の調査を開始するに至った。
太陽の光をクレーターの中のへ届け、銭湯は灯りとともに調査員を迎え入れる。
計画を引き継ぎ、なお未知の可能性と戦いつづける者たちへ、ママやがながら確かな敬意をこめて。

銭湯という建築

入浴のためにわざわざ銭湯へ赴くことで、単なる衛生行為は文化的な体験へと変化した。銭湯は日常の延長にありながら、特有の空間や儀式的な動作によって非日常性を帯び、心身を解放しつつ社会的交流を生む場となった。
この特性は、極限環境においても人間の心理的負荷を和らげる可能性を持つ。本提案では、未開の地へ降り立つ調査員の心身を支える場として、月面に銭湯を計画する。



リラクゼーション



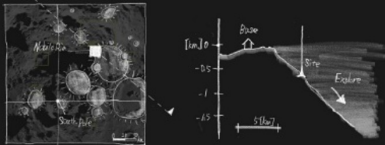
共感する空間



迎え入れる建築

氷採掘の帰路の安息

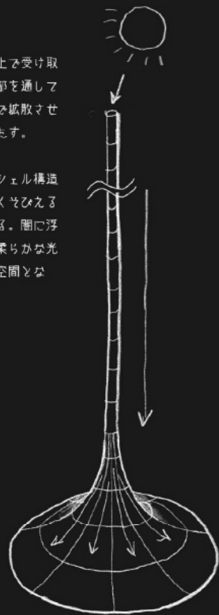
アルテミス計画最も心理的負荷が高いと予想されるクレーターでの氷の採掘調査を考慮して、拠点至までの帰路の斜面を敷地とした。拠点至に次ぐ第2の月面建築として調査員の安息の場を建設する。



太陽の光を、月の底へ

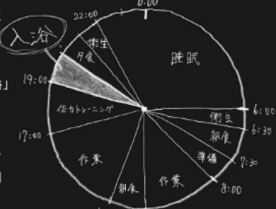
建築は太陽光を地上で受け取り、細長い塔の内部を通して地下へ導き、基部で拡散させ空間を穏やかに満たす。

月の重力下ではシェル構造として成立し、高くそびえる姿は象徴性を帯びる。闇に浮かぶその内部は、柔らかな光に包まれた静謐な空間となる。



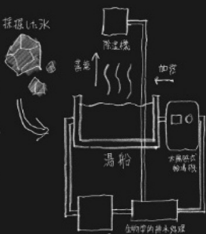
生存から生活へ

これまでの探査スケジュールは、任務と生存のための時間だけで埋め尽くされていた。しかし、この計画では、そこに「入浴」という生活の時間が加わる。ただ生きるためではなく、くつろぐための時間が生まれることが月面での持続的な調査にとって大きな役割を持つ。



氷を活用した水循環システムの構築

アルテミス計画で調査されるクレーターの氷を加熱、ろ過し、温泉水として利用したのち、再生処理を経て循環する。
単なる入浴施設としてだけでなく、月面での水の採取、運搬、再利用の実験的モデルとしても機能し、将来的な月面での長期滞在のための水管理システムの確立に貢献する。



月の石の壁

壁は鉄骨のフレーム、ワイヤー、ビニール、石材によって構成されている。輸送コスト削減のため、仕上げの石材は月の石を使用する。
これまでの宇宙建築は機能性と軽量化が重視されてきたが、石によって重量感のある空間を実現し、利用者に安心感を与える。

